

ジェンダー・エッセイ  
壁を越え、分かち合って生きる

東京大学大学院教育学研究科教授 本田 由紀 (ほんだ ゆき)

金融危機のあおりを受けて、日本の雇用情勢もきわめて厳しくなっている。今回の危機はそのマグニチュードにおいて石油ショックに匹敵するといわれ、また長期的に続くとも予測されている。新規卒業者の「内定切り」が続出していることから、これから数年の間に教育機関から労働市場に出てゆく若者たちが、「第2次ロスジェネレーション」になるおそれは強い。ただし、もはや日本の雇用問題は若者のものだけではなくてきている。93年頃から2004年頃までの長期不況下で出現した「第1次ロスジェネレーション」は、「いざなぎ越え」と呼ばれた景気回復期にも安定的な雇用へと吸収されないうまま、40代にさしかかろうとしている。現下の「派遣切り」「非正規社員切り」ひいては「正社員切り」の対象者の中には、多くの中高年齢も含まれている。90年代以降、若年雇用問題がクローズアップされてきたのは、働き方の根底的な変化がその時期には若者に集中的に表れてきたからにすぎず、これからは「若者と仕事」ではなく「仕事そのもの」の再検討と立て直しが必要になってゆくはずだ。

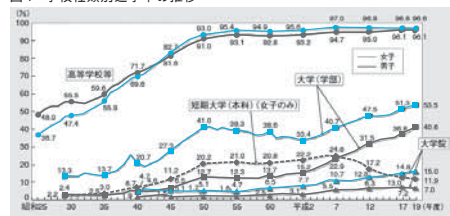
仕事という社会領域の変化は、家族やジェンダー、教育などの他の領域の変化と相互に絡み合っている。バブル経済崩壊後の仕事の世界では、最大限に能力とエネルギーを投入することを求められる正社員と、安価な雇用の調節弁として活用される非正規社員との両極化が進んできた。その中で、これまでは主に前者を男性、後者を女性が担ってきたというジェンダー面での分業は、基本的には継続あるいは強化されながらも、前者への女性の参入、後者への男性の参入もまた、かなりの規模で生じた。図1に示したように90年代には女性の大学進学率が大幅に上昇した結果、女性の新規大卒就職者数は過去20年間の間にほぼ倍増している。それと並行して、男性の新規大卒者の中にも卒業後に非正規社員になる者が一定の規模で現れており、また大卒未満の学歴の男性の場合、非正規社員になる確率はいっそう高い。こうして、長い時間、高い密度で働く正社員の中にも、また低賃金で雇用も不安定な非正規社員の中にも、男女が混在するようになっていく。

一方、家族社会学の知見によれば、男女が結婚する際には学歴や職業的地位などの面で同類婚(ホモガミー)になる傾向が強い。ここに、家族形成に関する矛盾が生じる。収入や雇用の面では相

対的に安定しているが長時間労働を余儀なくされている正社員の男性は、配偶者に「家庭に入る」ことを期待しがちだが、同類婚によりその配偶者候補として選ばれやすい正社員女性は就業の継続を望んでいる。逆に、収入や雇用が不安定な非正規社員の場合、男性は配偶者が働き続け収入を得てくれることを望んでいるが、彼らと同類性の強い非正規社員女性は結婚相手の男性に高い収入を期待し、自らは結婚後に仕事を辞めることを希望しがちである。こうして正社員男女、非正規社員男女の間には、自分や配偶者の就業継続について希望のずれ違いが生じており、それがいっそうの晩婚化や非婚化につながっていると考えられるのである。

非正規社員男性の切実な感情の代弁者である赤木智弘氏は、著書『若者を見殺しにする国(双風舎)』の中で「私は主夫になりたい!」と記している。しかし、男性稼ぎ手モデルと同類婚、そして正社員・非正規社員の働き方の対極性という3つの条件が共存する限り、赤木氏の願いがかなうことは難しいだろう。今後、厳しい経済情勢が続く中で、家族形成や長期的な社会のサステナビリティを確保するためには、正社員・非正規社員やジェンダー間、階層間の壁や極端な相違をできる限り取り払い、個々人がそれぞれに「ほどほどの」収入や時間を手にし互いに持ち寄り生活を紡いでゆけるようにすることが不可欠である。2009年が、そうした方向に向けて政治・経済・社会のすべてが舵を切る明確な転換期となることを、強く願う。

図1 学校種類別進学率の推移



(備考)  
1. 文部科学省「学校基本調査」より作成。  
2. 高等学校: 中学校卒業生及び中等教育学校前期課程修了者のうち、高等学校等の本科・別科、高等専門学校に進学した者の占める比率。ただし、進学者には、高等学校の通信制課程(本科)への進学率を含みません。  
3. 大学(学部): 短期大学(本科): 浪人を含む。大学学部又は短期大学本科入学者数(浪人を含む)を3年前の中等卒業生及び中等教育学校前期課程修了者数で除いた比率。ただし、入学者には、大学又は短期大学の通信制への入学者を含みません。  
4. 大学院: 大学学部卒業生のうち、新たに大学院に進学した者の比率(医学部、歯学部は博士課程の進学者)。ただし、進学者には、大学院の通信制への進学者を含みません。

(出典)内閣府男女共同参画局『平成20年版 男女共同参画白書』

Move この人にきく  
Cutting-Edge  
「カティング・エッジ」



CONTENTS

Move この人にきく…………… p.1  
Books ジェンダー最前線…………… pp.2-3  
Information…………… p.4

成立30年目を迎える女性差別撤廃条約

国際人権法の第一人者であるフィリップ・アルストン教授(ニューヨーク大学法科大学院)は、その著書の中で、フェミニズムは人権活動全般をより深く豊かなものにした、と述べている。人権法の発展の過程で、女性に対する人権侵害ほど無視され、放置されてきたものはなかった。それは世界の人口の半分の人権侵害に目を閉ざしていることにとどまらず、人権問題を社会的、経済的、政治的な生活の中で考える、という可能性を閉ざすものであった。これを変えたのが1979年に成立した女性差別撤廃条約である。この条約は女性運動の戦略を「女性の地位向上」から「男女の性別役割分業の撤廃」へと変容させ、女性と男性の法律上の平等のみならず、事実上の平等をめざし、国の差別撤廃義務の対象を公的領域から私的領域(家族や地域社会など)を包摂するものに変えてきた。



弁護士・国連女性差別撤廃委員会委員  
林 陽子 (はやし ようこ)

現在、女性差別撤廃条約の締約国は185カ国(国連加盟国は192カ国)、未批准の7カ国には米国が含まれる。1999年に成立した条約の選択議定書(女性差別の被害者が女性差別撤廃委員会(CEDAW)に救済を申し立てることのできる個人通報制度を含む)の批准国も84カ国に及んでいる。日本政府は女性差別撤廃条約を1985年に留保なく批准したものの、選択議定書の批准は「検討中」といふ説明のまま、進展がないのが残念である。

過去30年の間、世界では冷戦が終わり、グローバル化による市場主義経済への移行、宗教的な原理主義の台頭、先進国での少子高齢化の急速な進行など、女性の権利をめぐるさまざまな新しい問題が生じている。これらの風潮とCEDAWは無縁ではなく、現在、CEDAWが策定する勧告その他の文書をめぐっては普遍主義と文化的相対主義が激しいせめぎ合いを演じている。その背景には、1990年代以降、CEDAWは条約の扱問題を狭い意味での女性差別に限定しなくなり、女性に対する暴力への取り組みを強化しつつあり、文化や慣習、宗教に名を借りた女性の人権侵害の告発を続けていることが挙げられる。

2009年にはCEDAWにおいて日本政府の報告書審査が5年ぶりに行なわれる。この機会が日本政府の報告書だけでなく、広く世界の女性たちの置かれた状況により多くの日本人が関心をもつ契機となることを願っている。

未来・ことば

心と頭脳は性に関係がない行動も性に関係がない。おまえが心と頭脳をもつ人間である限り、よく覚えておきなさい。わたしは、決して、男らしく、あるいは女らしく行動するよう、おまえに命ずるものにはならないだろう。ただ、おまえに、生まれたことの奇跡から十分な収穫を引き出すように、決して卑劣さに屈服しないように求めるだけだろう。

オリアーナ・ファラーチ  
(イタリアのジャーナリスト、作家、政治インタビューー)  
『生まれなかった子への手紙』竹山博英訳、講談社、1980年)

## もうひとつのノーベル平和賞 - 平和を紡ぐ1000人の女性たち

じつと腕を組んで何かを見つめる端正な横顔。ロシア人ジャーナリストのポルトコフスカさんだ。チェチェン共和国の紛争取材し続け、凶弾に倒れた(本書は彼女に捧げられている)。横断幕を持った、「基地」軍隊を許さない行動する女たちの会「の高里鈴代さんがある。先住民民族シュクルー族の母と称されるアラウジョさんが、不屈の闘志のまなざしをこちらに向ける。無造作にレインコートを羽織り、人骨を手取るのは法医人類学者のクロフスカさん。大規模死体遺棄地(マス・グレイブ)の遺体を発掘し、バレーン紛争の行方不明者を捜し出している。このように本書のどの頁にも150カ国、1000人のピースウーマンのストーリーが展開する。

本書は、2005年のノーベル平和賞に1000人の女性を推薦するという、スイスで始まったプロジェクトにおける、候補者たちの写真と活動を紹介したものだ。その多岐にわたる平和構築のための活動は10分野に整理されている。本書は、平和を考え行動する人々にとって必携のガイドブックとなり、研

究者・学習者にとっては、「世界女性平和運動人鑑」として利用できる。日本語版に向けて、1000人のボランティアが翻訳にかかわっているのも興味深い。

### ノーベル平和賞女性受賞者

ノーベル平和賞の女性受賞者は10人を超え、他部門よりも女性の比率は高い。最初の女性はベルタ・フォン・ズットナーで、彼女の小説『武器を捨てよ』は、平和運動誌のタイトルになった。著名な受賞者にはソーシャルワークの先駆者ジェーン・アドams、マザー・テレサ、アウンサンスーチー、最新では環境保護活動家のワングリ・マータイがいる。男性と比較すると受賞者に政治家が少ないようだ。

本書にガンディーの「平和への道はない。平和は道そのものだ」が引用されている。ノーベル平和賞の候補を5回も固辞したというガンディーは、今回1000人の候補者が受賞しなかったことを言っているかもしれない。

とみなが けいこ 富永 桂子 (福岡大学非常勤講師)



青山 薫、石原 みき子、松本 真紀子 日本語版プロジェクトコーディネーター  
金曜日  
2008 年初版  
8,000 円 (税別)



## ジェンダー研究のフロンティア第5巻 欲望・暴力のレジーム - 揺らぐ表象 / 格闘する理論

お茶の水女子大学21世紀COEプログラムでの5年間にわたる共同研究の成果をまとめた本書は、とすればアカデミズムの世界に自閉していると思われがち文化表象のジェンダー分析や理論構築が、現実の世界と見事に切り結ぶさまを読者に体験させてくれる。

第1部「文化と流通」と第2部「欲望と暴力の表象」における分析対象は、美術や文学から、少女小説、ハリウッド映画、漫画などの大衆文化メディアに至るまで幅広い。日々の営みにおいて私たちが支配的イデオロギーをいかに無自覚に再生産し/させられているのか、また私たちの欲望が、それとはわからない形でいかに暴力に加盟しているのかという点に目を開いてくれる刺激的な論考ばかりである。

ジェンダー理論の現在を探る第3部には、ジュディス・バトラ、ジョアン・コブツェック、ガヤトリ・スピヴァクの講演に基づく貴重な原稿が収録されている。難解といわれて久しいジェンダー・フェミニズム思想の最前線にいる理論家たちの論考を、い

かにして政治的戦略につないでいくのかという問題意識のもと、第3部には、編者である竹村和子氏の最終章も含めて、理論構築の世界と現実社会を乖離させないという決意が漲っている。ジェンダー研究の最前線を知るための必読の書である。

### 欲望

「人間の欲望は他者の欲望である」といったのはラカンであり、個人の欲望を言説の権力政治のなかに位置づけたのがフーコーであった。法が「市民主体の形成」という民主主義の手続きを通して、その暴力を不可視のものにしていくことを喝破したフーコーの理論は、これまで巧妙なやり方で市民主体から排除されてきた女性(欲望の対象とされた者)や非異性愛者(欲望を否定されてきた者)に革新的参照点となった。以後、ジェンダー体制は、それが前提として不問に付していた「個人の欲望の物語」にまで遡って、批判的に検証されることになったのである。

みやもと けいこ 宮本 敬子 (西南学院大学文学部教授)



竹村 和子 編者  
作品社  
2008 年初版  
2,500 円 (税別)



## アジア系アメリカ演劇 - マスキュリニティの演劇表象

アメリカのアジア人男性は、常に「非男性性」の不安に晒される。イチローにせよ松坂にせよ、日本人がメジャーリーグへ行けば髪を伸ばすのはなぜかを考えてみればよい。では「女性的なアジア人」とは、米国文化のいかなる必然が生み出したイメージなのか? ブルース・リーのように入れればよいのか? アジア系であり、ゲイでもあったらどうなるのか?

本書は、本邦初のアジア系アメリカ演劇の専門書であり、ステレオタイプに抗する政治的・演劇的な「再=男性化」の功罪を整理したのちに(第1部)『M・パタフライ』の作者として名高いD. H. ホワンの作品群から見えてくる問題系を緻密に検証し(第2部)さらには、新潮流の舞台が再構築するアジア系アイデンティティの多様性を、フェミニズムとクィア批評の地平に鋭く定位する(第3部)

著者が敷衍するとおり、「多文化主義的アメリカの縮図ともいえるアジア系アメリカ演劇の現状」は、「今後、グローバ

リズムの大きな潮流の中でいっそう多文化主義的傾向が強まっていくと思われる日本社会」をも照らし出す。演劇研究者はむろん、アメリカあるいはアジアとジェンダー/セクシュアリティに関心を持つすべての読者に一読をすすめたい。

### アジア系アメリカ演劇とジェンダー/セクシュアリティ

アジア系アメリカ演劇とは、いわば、エドワード・サイードとジュディス・バトラが交差する地平に息づく舞台芸術である。つまり、それはまず、西洋(アメリカ)が東洋(アジア)を都合良く「女性化」しようとするオリエンタリズムの権力性に抵抗する。加えて、ジェンダー・アイデンティティとは、その表現に先立って存在する本質主義的概念ではなく、反復される言語行為によって構築され、可変的に意味づけられるという(フォーマティビティ)の認識を、とりわけ鋭利な政治的自覚とともに打ち出しているのがアジア系アメリカ演劇である。

せつこ ともゆき 舌津 智之 (立教大学文学部教授)



山本 秀行 著  
世界思想社  
2008 年初版  
2,400 円 (税別)



## フェミニスト・ポリティクスの新展開 - 労働・ケア・グローバリゼーション

本書は90年代以降、女性の雇用労働が量的には拡大し、経済的・社会的に基幹労働になりながら、待遇が不安定化していきさまを明らかにする。しかも逆説的にも待遇の悪さゆえに、労働従事者本人ですら「自分が労働に就いている」との意識は希薄になる。いましていることはアルバイトに過ぎないとか、やりがいがあるのとお金のためではなく働くのだとか、不安定労働の問題性が社会的にも本人からも見えなくなっていく「労働の消去」が生じる。

女性労働の待遇が低いのは、それがしばしばケアに近い性質を帯びるからだ、との指摘はかねてからされてきた。ゆえにワーカース・コレクティブなど、営利追求型ではない職場をつくるなかで、ケア労働を有償化しつつ社会的価値を高めることが提唱されてきた。だがそれが国境を越えたケア労働市場が形成される今日、低賃金化の波にもまれて、女性労働の待遇を、排外主義に陥らずいかに向上させ得る

のか。ケアの価格が市場の需給関係で決まるのではなく「公定価格」を与えられる(脱商品化)状態であれば、外国人労働者の参入とケア労働の低待遇を切り離し得る、との指摘など、本書から得られる示唆は多い。

### 脱商品化

女性が偏って担う「仕事」に関し、負担公平化や社会的価値向上、それへの従事ゆえに被る経済的不利益の軽減は、アンペイド・ワーク論などで議論された。だがそこには有償化(対価の支払)、社会化(近親関係を越えた負担公平化)、市場化(他の労働や商品同様の市場での交換関係への結ぶ)など、いくつもの次元がある。脱商品化は、一度商品化されたサービスや財を、公共事業化などの方法で市場から引き上げること。公共サービス民営化がケア労働者の待遇をむしろ低下させたことから、近年注目される概念だが、無償性の単純な維持と混同されてはならない。

かいづま けいこ 海妻 径子 (岩手大学人文社会科学部准教授)



足立 真理子 編者  
明石書店  
2007 年初版  
3,800 円 (税別)



## 環状島=トラウマの地政学

「環状島」はドーナツ型の島。トラウマをめぐる海中にある。中心点はトラウマをもたらし事件が起きた地点。そこには深い内海がある。何人もの性暴力被害者が、言葉もなく内海に沈んでいった。しかし中心点は、なだらかな斜面で陸地へと続いている。陸地は山の頂に、島の外側に、またなだらかな斜面で続いている。生き延びることができれば、被害者は内海から内斜面へ、頂上へ、外斜面へと向かい、社会に向けて性暴力を訴えることができる。かもしれない。そして被害者は一人ではない、そもそも環状島は、第三者の支援や社会全体の性暴力に対する認識の深化、言葉による説明の可能性がもたらされて初めて深海から隆起し、被害者と支援者が拠って立つことのできる地面を形成し、嵐を避ける島となるのだ。

精神科医、カウンセラー、社会人類学者である宮地尚子は、このような比喩で被害者と被害、被害者と加害者、被害者と支援者、支援と社会運動、運動とケアの関係を描き出す。

本書の最大の功績の一つは、視覚化を促すこの比喩が、これら諸関係の複雑さを「白か黒か」のデジタルでなく連続的につながっているアナログな事象として、どの立場にある読者にもイメージさせ得る点にある。

### 複合的アイデンティティ

人はさまざまな関係のなかで生きており、いちいちの関係によって一定のアイデンティティを持たされる。時と場所と相手によって人は違ふ者となる。それしかし、その人があるアイデンティティをもって存在するとき別のアイデンティティを忘れてしまうということではない。人はみな複数のアイデンティティが統合された存在であり、この認識を促すのが「複合的アイデンティティ」である。この用語は、現実社会において、たとえば暴力被害者がいつでもどこでも被害者として振舞わなければならないというようなプレッシャーを避けるために有効である。

あおやま かねる 青山 薫(ビープルズ・プラン研究所共同代表、京都大学文学研究科親愛圏GCOE 特定助教、独立行政法人国立女性教育会館客員研究員)



宮地 尚子 著  
みすず書房  
2007 年初版  
2,800 円 (税別)



## 新刊・新着本紹介



平成 20 年版  
青少年白書  
青少年の現状と施策  
内閣府  
2008 年 1 月発行  
1,500 円 (税別)



平成 20 年版  
自殺対策白書  
内閣府  
2008 年 12 月発行  
2,000 円 (税別)



弁護士白書  
2008 年版  
特集 男女共同参画と弁護士  
日本弁護士連合会  
2008 年 11 月発行  
2,571 円 (税別)



世界人口白書  
2008  
共通の理解を求めて  
文化・ジェンダー・人種  
国連人口基金  
2008 年 11 月発行  
無料配布



Generation of Change:  
Young People and  
Culture  
United Nation Population  
Fund  
2008 年初版  
無料配布